まなびやの学生たち

キャンパスの出会い

文学部教授
岩下 武彦（いわした たけひろ）

1946年生まれ。1974年東京大学大学院修士課程修了。国文学研究資料館、名古屋学院大学、東京女子大を経て、1995年より中央大学文学部教授。

学風と学生気質（かたぎ）

1995年以来、中央大学に奉職して、今年で22年になる。自然に恵まれ、自由でおおらかなキャンパスの中で、多くの学生諸君に接してきた。概ね（おおむ）、地味だが真面目で努力家、という中央大学の学風を、よく体現したタイプが多く、環境としては恵まれていたと思う。そういう学生諸君の中で、印象に残る出会いを、記憶をたどりながら記すことで、責めを塞がせて頂きたい。

2部の学生の個性

2010年まで、文学部には2部（夜間部）があり、私が赴任した頃は、まだかなり多様な学生がいた。中央大学の2部は、固定時間割で、きちんと授業を受け試験にパスすれば、4年で卒業できるシステムだから、昼間働きながら苦学する頑張り屋の学生にとっては、合理的で効率の良いシステムだった。そこで、学ぶ学生の中には、その分、かなり個性的な学生もいた。

4年次の3月といえば、もうほとんどの学生は進学なり、就職なり、行く先が決まって卒業式に臨む頃だが、彼は就職先が未定であった。気にはしつつも、学年末の慌ただしさに追われていたある日、研究室のドアが勢いよくノックされた。「先生。就職決まりました！」「おう、おめでとう」。さて、いきさつを聞いて驚いた。

面接を受けては落とされ、いよいよ切羽詰まって、通学の往還に見かけた、ある小さな会社を訪ねたのだそうだ。「社員募集」の掲示もない。無論アポなしである。入るなり「社長さんにお会いしたい」とふっ掛けたものだから、社員は目を白黒させたろうが、窮すれば通ず、という。即座に社長面接となって、「おもしろい奴だ」ということで、採用された、というのだから、その頃はまだ、世の中捨てたものではなかったと思う。2部の学生にはこういう型破りな、バイタリティーのある学生が、確かにいた。

1部の学生の底力

1部の学生たちに、そういう型破りな学生は少なかったが、例えば、地味で真面目で努力家という、絵に描いたような学生が、黙々と仕上げた卒業論文は「山部赤人論」400字詰め無慮280枚余。その一部は「白門国文」に載る。着実に調べ上げた結果を積み重ねた実証的な論で、丁寧なでき上がりであった。中央大学の学風を体現して、底力を見せてくれた一人である。

また、私の分野では、知人と協力し

て、夏休みに数校が合同合宿をする。そこで4年生は卒業論文の中間発表をするのであるが、学生たちにとっては、またとないプレゼンテーションの訓練の場となる。論文でしか知らない先生たちから、直に指導を受けるのである。

先生たちからは、時に容赦なくダメ出しが飛ぶ。単刀直入に「君の……と……はだめだよ」。あるいは、優しそうな風貌とやわらかな関西弁で「ええねん。ええねん。君の考えはそれでええねん。けどな……」と、……以下で、学生の論をテーブルごとひっくり返してしまう。しかし、一番怖いのは我々の仲間内で、一番明晰な先生が頭を掻き掻き、「よう解らへんのやけど……」と、のっそりと立ち上がった時である。

合同合宿

彼が解らないということは、よほど難しいか、全く筋が通らないか、どちらかだからである。ここで叩かれながら耐えきった学生たちは、確実に一回り大きくなっている。中央大学の学生たちは、概ねそつなく切り抜けていて、その点私は安心だったことを告白する。

中央大学の4校の附属学校は、それぞれ独自の方針で、多様で個性的な学生を送り出している。ある附属高校出身の学生は、私のゼミで、その年に最もまとまった卒業論文を書いた。高校時代は余り目だたなかったというが、基礎力はあるという見本である。

学生部を通して

赴任してしばらくしてから、文学部の学生部委員に選出された。そこでは主に学生たちの課外活動を通して、教室では気づかない、学生たちの闊達な面に接することとなった。

当時は準備と片付けを含めて5日間の白門祭を仕切っていたのは「白門祭実行委員会」(白実委)の学生たちである。水際だった運営で、5日間、私が担当した2年間は、事故もなく見事なものであった。学生部が、学生の自立を見守る姿勢に徹していたことも、印象深い。また、そういう分掌を通して、職員の人たちとの交流ができ、多様な学生たちの存在に気づかされたのでもあった。私にとっては貴重な体験で、身近でトラブルを抱えた学生に出会った時の対処についても、学ぶところが多かった。

外国人留学生

国文学専攻は、文学部全体で見ても外国人留学生の比較的多い専攻である。殊に大学院は、中国、韓国、東南アジア諸国、また、中東と様々な地域から多様な学生たちが留学してきている。

最近では在籍学生の過半が留学生ということもある。その多くは、難しい日本語と悪戦苦闘しながらも熱意と努力で、課程在籍中に学位を取得している。修了してからは日本や母国で教育・研究職に就いたり、また、企業で活躍している者も多い。専攻の性質上、漢字文化圏からの留学生が多いが、今年はJICAの派遣で、エジプトからの留学生もいる。大学院は学生同士の仲も良く、規模は小さいながら、国内でのグローバルな交流の場として、機能していることは確かである。

ただ、一昨年まで、留学生向けの「日本事情」という講座を担当した経験で申せば、受け入れ側として、体制が十分に整えられているかと問われると、日本語をはじめ、学習へのサポート、一般学生との交流、留学生活全般に対するケア、等のどの面を取っても、まだ不十分だと思う。

外に学生を送り出すことは、重要な課題であるが、受け入れる学生の処遇も改善の必要があると思う。

国文学会懇親会

おわりに

最後に、これまで晦渋な授業にお付き合い頂き、貴重な時間を共に過ごしていただいた学生の皆さんに、衷心から御礼申し上げる。停年までどうにか無事にたどり着けそうなのは、すべて、皆さんのおかげである。末筆ながら、皆さんのご健勝と、文学部・中央大学の弥栄を祈念して、感謝のことばとしたい。